２０２２年度

湘南白百合学園中学校

入　学　試　験　問　題

# 国　　語

１教科入試　６０分

| 受験番号 | | 氏名 | |
|---|---|---|---|

〇受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

＊答えは解答用紙に書きなさい。

# 一

## 次の問いに答えなさい。

**問一**　次の――線部の漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字で答えなさい。

①　君はぼくの竹馬の友だ。

②　姉は血相を変えて走った。

③　画一的な生活様式。

④　人の命に軽重はない。

⑤　彼は経営の第一線から退く。

⑥　審査員（しんさいん）が演奏のコウヒョウをする。

⑦　ユウシュウの美を飾（かざ）り卒業する。

⑧　イッシ乱れず行動する。

⑨　会議のために時間をアける。

⑩　印刷前の文章を赤いペンでコウセイする。

**問二**　次の慣用句やことわざの□にあてはまる生き物の名前を、それぞれ**ひらがな**で答えなさい。

①　□の手も借りたい。

②　能ある□は爪（つめ）を隠（かく）す。

③　□の一声。

④　□のはい出る隙（すき）もない。

**問三**　次の（1）・（2）の問いに答えなさい。

（1）【A】・【B】の①～④には、それぞれ上下左右で二字熟語が成り立つ漢字一字が入ります。その漢字の順番を入れかえ、組み合わせてできる四字熟語をそれぞれ答えなさい。

（2）（1）で答えた四字熟語の意味として、最もふさわしいものを後のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

**【A】**

| | | |
|---|---|---|
| | 戸 | |
| 出 | ① | 論 |
| | 実 | |

| | | |
|---|---|---|
| | 混 | |
| 複 | ② | 念 |
| | 誌 | |

| | | |
|---|---|---|
| | 善 | |
| 険 | ③ | 意 |
| | 質 | |

| | | |
|---|---|---|
| | 伝 | |
| 宣 | ④ | 葉 |
| | 語 | |

ア　死にものぐるいで戦うこと。

イ　さまざまにののしること。

ウ　身勝手でいいかげんなふるまいをすること。

エ　自分の利益になるように取り計らうこと。

【B】

| | | |
|---|---|---|
| | 情 | |
| 予 | ① | 告 |
| | 道 | |

| | | |
|---|---|---|
| | 要 | |
| 勝 | ② | 習 |
| | 子 | |

| | | |
|---|---|---|
| | 効 | |
| 結 | ③ | 物 |
| | 実 | |

| | | |
|---|---|---|
| | 順 | |
| 反 | ④ | 用 |
| | 対 | |

ア　言うことが取りとめなく、その理由も考えもないこと。
イ　いろいろと心をくだいて工夫（くふう）し、物事をやりとげようとすること。
ウ　軽はずみにことを起こし、向こう見ずな行動をすること。
エ　前世や過去の行いの善悪に応じて、必ずそのむくいがあること。

**問四**　次の――線部の語を言いかえたものとして、最もふさわしいものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

①　持続可能で多様性のある社会づくりが求められている。

ア　グローバル　　イ　モチベーション
ウ　サスティナブル　　エ　ユニバーサル

②　文化祭の出し物をみんなで討論して決めた。

ア　ジャッジ　　イ　セッション
ウ　ディベート　　エ　ディスカッション

**問五**　次の会話文を読んで、[1]・[2]にあてはまる季節として最もふさわしいものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

（注）かつては一月から三月は【春】、四月から六月は【夏】、七月から九月は【秋】、十月から十二月は【冬】と区分していました。

さくら　「今日、国語の授業でリズミカルな[1]の歌を習ったよ。『せりなずな　ごぎょうはこべら　ほとけのざ　すずなすずしろ　これぞ七草』っていう歌なの。」

きくみ　「あ、知ってる。その七草を入れたおかゆを食べると、万病を防いで寿命（じゅみょう）が延びると言われているらしいね。」

ゆりや　「季節を歌うといえば、芭蕉（ばしょう）の『たなばたや　[2]をさだむる　夜のはじめ』っていう俳句もあるわね。いよいよ[2]がやってきたって詠（よ）んだものもいいなって思うわ。」

ア　春
イ　夏
ウ　秋
エ　冬

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。（設問の都合上、本文を一部省略しています。）

《小学校六年生の朋樹は、北海道富美別町にある祖父母のもとに一人で来ている。ここでは町立自然博物館の元館長であり、ユーホロ川で[*1]アンモナイトの発掘調査をしている戸川と出会う場面が描かれている。》

「何年生だ」戸川が水筒のふたを開けながら言った。

「六年」

「中学受験するんだろう。夏休みの間も塾があるんじゃないのか」

「ありますけど……今ちょっと休んでて」

「――そうか」

見透かすような戸川の視線を受け、①無意識にキャップの後頭部に手をやった。無理に声を明るくする。

「でも大丈夫ですよ。僕、これでも結構成績いいんで。どれぐらい休んだらヤバくなるかは、自分でわかります。そう簡単には追いつかれない」

「上に追いつくこともできないんじゃないのか」

「いや、偏差値の高い学校ならいいってわけじゃないんで。やっぱ、偏差値と校風のバランスっていうか。ほら、人に聞いたりネットで調べたりしたら、その学校のリアルな校風って、a わかるじゃないですか」

言っているうちに、胃のあたりに不快感が広がった。

「大人びてるな」戸川は水筒の中身をひと口含んだ。「いい学校を出て、将来は何になりたいんだ」

「母は、医者か弁護士ってずっと言ってますね。でもこの先、弁護士は生き残り競争が激しくなるってこと、わかりきってるし。リスクが少ないのは、やっぱ医者かな。父も同じ意見だと思いますよ。具体的な話まではしませんけど、父が考えてそうなことは b わかるんで」

「私が訊いているのは――」

「僕自身はどうなのかってことですよね？」朋樹は先回りした。「でもそれって、今決めることじゃなくないですか。大学に入るまでの間に考えだって変わるだろうし。とにかく、今から勉強しとけば将来の選択肢が増えるってことは c わかってるんで。でも母はそこがよくわかってないんですよね。自慢できるような職についてほしいって気持ちは、 d わかりますけど」

言い訳でもするようにまくしたてる朋樹を、戸川はじっと見つめていた。

「君は、何でも e わかるんだな」

不意の言葉に、胃がぎゅっと締めつけられた。戸川に悟られぬようわずかに身をかがめ、浅い呼吸を繰り返す。

痛みが和らぐにつれ、胸の奥底に沈めていたことが、あぶり出しのように浮かび上がってくる。塾に行けなくなった本当の理由だ。

朋樹は今、泥の中にいる。海底の泥にとらわれたアンモナイトのように、身動きがとれないでいる。何が問題かということは、全部わかっているはずなのに――。

朋樹には、ずっと憧れている学校がある。鎌倉にある中高一貫の私立男子校だ。父方のいとこが通っていて、以前から学内の様子を詳しく聞かされていた。伝統校でありながら、自由な雰囲気。教師陣は個性的で、受験一辺倒の授業はしない。それでも進学実績は素晴らしく、最近ではアメリカの一流大学に進む生徒も増えている――。

そんな話を刷り込まれていれば、当然自分もその学校に、と思うようになる。朋樹は何ら疑問を抱くことなく、四年生から進学塾に通い始めた。成績は順調に伸び、すぐに最上位のＡ１クラスに上がることができた。

五年生になると、状況に二つ変化が起きた。一つは、両親の別居。父親が帰宅しない日がだんだん増えていたので、その気配は感じていた。父親のことは好きだったし、父親も多忙ながら朋樹には精いっぱいのことをしようとしてくれていたと思う。だから、「明日からパパとは別々に暮らすんだよ」と母親に告げられたときの衝撃は、今なお残響として朋樹の胸の奥にある。二、三ヵ月は勉強が手につかず、もう少しでＡ２クラスに落ちるところだった。

もう一つ変わったのは、鎌倉の学校の受験資格だ。来春の入試から、「通学時間が片道九十分以内であること」という制限が設けられることになったのだ。豊洲の自宅から学校まで、どんなに急いでも百分以上かかる。他の学校が眼中になかった朋樹は、愕然とした。

（中　略）

朋樹の頭と心は、中に泥でもつまったかのように、機能を停止してしまった。あふれ出した泥は、とうとう体まで侵し始めている。朋樹が化石になってしまうのは、もはや時間の問題だった――。

ハンマーの音で我に返った。見れば、戸川が手近な石を拾っては叩き割り、断面を確かめている。どれも似たような川原の丸石で、*2ノジュールではない。ある石は捨て、ある石はテーブル状の岩の上に並べていく。

並んだ石が七つになったところで、戸川は言った。

「わかった気になるというのは、危険なことだ」

「え――」かすれた声しか出なかった。

「君みたいに頭のいい子にとっては、とくに。親の話でも授業でもニュースでも、耳で聞いただけですんなり頭に入ってくるだろうからな」

「それのどこが――危険なんですか」それ以上聞きたくないのに、確かめずにいられない。

「たとえば君は、ここにある石を分類することができるか？」戸川は七つの石を示した。どれも一部が割り取られ、中の新鮮な面が見えている。「名前はどうでもいい。同じ石はどれとどれだ。幼稚園でやる、仲間にわけてみましょうというやつだよ」

試される苦痛を感じながら、端から順に断面に触れていく。まず二個をよりわけた。

「この二つは……」喉を絞るようにして答える。「たぶん、泥岩だと思います」

「そうだな」戸川がうなずく。

他の五つはやや粒が粗く、それぞれ微妙に色合いが異なっていた。同じだと言われればすべて同じに見えるし、違うと言われたらすべて違って見える。決め手がなかった。しばらく悩んだ末、半ば投げ出すように言う。

「あとは……全部砂岩」
「違う。砂岩と呼べるのは、これとこれだけだ」戸川は二つの石をわきにどけた。「残り三つのうち、この二つは安山岩。火山岩の一種だな。最後の一つは、私にもよくわからない。おそらく変成岩の一種だと思うが」
「いや、だってそんなこと――」
「習っていないから仕方ないか。だが、私が訊いたのは石の種類ではない。同じ石どうしにわけろと言っただけだ。それさえできないのなら、②岩石の名前をいくつ知っていても分類など無理だろう」
「そうかもしれないけど、こんな曖昧な違い――」
「わかるは、わけるだ。③正しくわけるというのは、人が思うほど簡単ではない」
戸川は、安山岩と呼んだ石と砂岩を一つずつ握り、断面を朋樹に向ける。
「わけるポイントを知っていれば、うまくいく場合もある。安山岩などの火山岩は、溶岩が冷え固まったものだ。だからよく見ると、結晶の――粒の形が角ばっている。かたや砂岩は、陸地で削られた砂粒が海まで運ばれてできたものだ。だから粒子は角が取れていて、丸い」
戸川はベストのポケットから小さな金属製のルーペを取り出し、朋樹に手渡した。使い方を教わって、二つの石を見比べる。
「……ほんとだ」戸川の言ったとおりだった。
「だがまあこんなこと、君にはできなくて当然だ」戸川は平然と言う。「私は大学で地質学を専攻したが、大学四年になっても、今の君と同じようなものだった」
「そんな、嘘でしょ」
「嘘ではない」戸川はきっぱりと言った。「昔の地質系の学生は、三年か四年になると、ある地域の地質図を独力で描かされるのが普通だった。まあ、実地のトレーニングだな。一人で何週間も山の中を歩き回り、岩石を採取して、地質の分布を地図にするわけだ。私に割り当てられたのは日高のほうだったが、民宿に泊まり込んで、来る日も来る日も山に入ったよ」
戸川は、体を川のほうに向けてあぐらをかき直し、続ける。

「私は、それなりにやれると思っていた。構造地質学も岩石学も堆積学も学んでいたし、岩石薄片の偏光顕微鏡観察もマスターしていた。君と同じで、すべてわかっているつもりだったわけだ。ところが、ハンマーとルーペだけ持っていざ野外に放り出されてみると、まるで歯が立たん。実際の自然は例外に満ちていて、＊3混沌としていた。岩石の面構えだけを見る限り、同じものなど一つもないように思えたよ」

朋樹は、さっきの安山岩と砂岩にあらためて目を向けた。この二つは、まだわかりやすいものを戸川が選んだのだろう。川原にある無数の石を細かく見ていけば、それこそ無限のバラエティがあるのかもしれない。

「とりあえず、採ってきた石を宿に持ち帰り、毎晩ひたすら眺めた。八畳間を調査区域に見立てて、歩いたルートに沿って毎日並べていったんだ。畳の上にずらーっとな。ところが、石が増えていけばいくほど、わけがわからなくなった。しまいには布団を敷く場所がなくなって、廊下で寝たよ」

民宿の一室で石に囲まれ、途方に暮れる戸川。その姿が、川原を埋めた名も知れぬ石の上にいる自分と重なった。

「そんなある晩のことだ。相変わらず部屋でうんうん唸っていた私は、何気なく一つの石を手に取った。正体がわからず、放ったらかしにしてあった石の一つだ。それをじっと見ているうちに、ふと、似たような石が他にもあったような気がしてきた。私は、今まで考えに入れていなかった正体不明の石たちを、あらためて観察した。種類を同定しようってことじゃない。ただ単に仲間わけしてみようと思ったわけだ。そして、気がついた。その石たちは、ある特徴で二つのグループにわけられる。それだけじゃない。そいつらを畳の元の位置に戻してやると、二つのグループの分布の境界が、見事に一本の線になっていることが f わかったのさ。

夜中だってのに、思わず叫んだよ。次の瞬間には、調査区域の三次元の地質構造が、八畳間全体にぼんやり浮かび上がってきた。あの不思議な感覚は、今も忘れられん」

ずっと川面を見つめて話していた戸川が、④視線を朋樹に向けた。話に引き込まれていたので、何の反応もできない。朋樹は

1 次の言葉を待った。

「私はそのとき思い知った。わかるための鍵は常に、わからないことの中にある。その鍵を見つけるためには、まず、何がわからないかを知らなければならない。つまり、わかるとわからないを、きちんとわけるんだ」

（中　略）

戸川は地面のハンマーを二本拾い上げると、一本を朋樹の目の前に差し出した。

「科学に限らず、うまくいくことだけを選んでいけるほど、物事は単純ではない。まずは手を動かすことだ」

コンビニ弁当をかきこむと、石を枕に寝そべる戸川を尻目に、崖へと戻る。

不発に終わった午前中とはうって変わって、掘り始めて五分もしないうちにハンマーが目当てのものを引っかけた。今までで一番の大物。ドッジボールのようなノジュールだ。

両手で抱えて小石の上に据え、表面の土をはらう。その大きさと形からして、かなり手強そうだ。ゴーグルを装着し、ハンマーを握りしめた。

キンキンキン、キンキンキン。

ハンマーは勢いよく弾き返される。ノジュールには傷もつかない。手のマメが痛むが、もっと力を込める。

キンキンキン。あごをつたう汗が、ノジュールの上に落ちた。いったん手を止め、Tシャツの袖で顔をぬぐう。

ハンマーの音が止んだ途端、やかましいセミの声が谷間に鳴りわたる。昨日スマホで調べてみた。エゾゼミというらしい。

北の空に目をやると、絵に描いたような入道雲が見えた。今日も夕立があるかもしれない。急がないと――。

キンキンキン、キンキンキン。

ノジュールをにらみつけ、声にならない言葉とともに、力いっぱい打ちつける。

わかんねーよ、何もかも。

志望校のことも、塾に行けるかどうかも、自分の本当の気持ちさえ。

⑤ここへ来てわかったのは、ただ一つ。このまま化石になってたまるかってことだ――。

時おり浮かぶそんな思いも、ハンマーを振り続けているとすぐに消え去る。代わって頭を埋めつくすのは、いずれ目の前に現れる、見事なアンモナイトの姿――。

キンキンキン、キンキンキン。
暑い――。頭からキャップをもぎ取って、放り出す。
キンキンキン。腕がだるくなってきても、叩くリズムは緩めない。
戸川が近づいてくるのが視界の隅に見える。だが朋樹は、地面のキャップを拾おうとはしなかった。
「叩けるようになってきたじゃないか」
そばで戸川が言ったが、顔も上げない。
キンキンキン。
「夢中だな」戸川がにやりとする。
キンキンキン。
「ていうか、僕は――」
朋樹はハンマーを振り下ろしながら、ノジュールに向かって言った。
「アンモナイトがほんとにイカやタコの仲間なのかどうか、この目で確かめてやろうと思ってるだけです」
次の瞬間、⑥ハンマーがめり込むような手応えとともに、鈍い音が響いた。

（伊与原 新『月まで三キロ』所収、「アンモナイトの探し方」）

（注）＊1　アンモナイト…巻貝の形の殻を持つ化石。物語に登場する博物館では「―サザエなどの巻貝と混同されるが、分類学的にはイカやタコの仲間―」と表示している。
＊2　ノジュール…地質体中に見られる、周囲と成分の異なる塊。この中に化石を閉じ込めていることがある。
＊3　混沌…様々なことが入り混じって区別がつかないさま。

**問一**　――線部①「無意識にキャップの後頭部に手をやった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　中学受験に向けた学習を続けてはいるが、ひと時とはいえ祖父母のもとでのんびりと夏休みを過ごしていることに後ろめたさを感じたから。

イ　中学受験に向けた学習にはげむことができない原因を戸川にあたかも知られているかのように感じられ、おのずと隠(かく)そうとしたから。

ウ　中学受験のために通う塾を休んでいる理由を、出会ったばかりの人にいきなり話す必要はないであろうととっさに感じられたから。

エ　中学受験に向けた学習を中断している本当の理由を、のんびりと間を置いた話し方をする戸川はまったく知らないであろうと安心したから。

**問二**　a［わかる］・b［わかる］・c［わかってる］・d［わかります］・e［わかる］・f［わかった］は、それぞれどのような意味合いの言葉として用いられていますか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　a～eは、物事の本質を追究することなく表面的な事がらの理解に留まる言葉だが、fは、自らの行動や体験から実感をともなって理解した上で用いている言葉だという違(ちが)いがある。

イ　a～eは、自分の体験をとおして得た知識から理解したことを示す言葉だが、fは、先人たちの研究内容と一致(いっち)したことを示す言葉として用いているという違いがある。

ウ　a～dは、実際には理解していないことを相手に悟(さと)られないようにあえて用いている言葉だが、e・fは、本当に理解したことをうそいつわりなく伝えるために用いている言葉だという違いがある。

エ　a・c・fは、自分の行動や体験から独りよがりに導き出して理解したことを示す言葉だが、b・d・eは、他者の思いを推(お)し量り理解したことを示す言葉として用いているという違いがある。

**問三**　――線部②「岩石の名前をいくつ知っていても分類など無理だろう」とありますが、なぜ戸川はこのように言ったのでしょうか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　同じ岩石どうしにわけることを求めているのに、朋樹は一つひとつの岩石の種類名を特定することに必死となり、疑問に答えることはできないだろうと思っているから。

イ　岩石の種類は多種多様にあるため、学校や塾で覚えた知識だけでは不十分であり、専門的知識を持っていない朋樹には十分に分類することはできないだろうと思っているから。

ウ　岩石の種類の知識ぐらい受験勉強でしっかり身につけておかなければいけないのにもかかわらず、間違えたり悩んだりする朋樹の様子から、十分に分類することはできないだろうと思っているから。

エ　岩石の種類を受験勉強のような知識として覚えたとしても、実物と向き合い丹念（たんねん）に観察することをしなければ、分類することはできないだろうと思っているから。

**問四**　――線部③「正しくわけるというのは、人が思うほど簡単ではない」とありますが、戸川がこのように思うのはなぜでしょうか。戸川が大学生であったときに行った地質調査について書かれた文章中から、その理由が最もよくわかる一文を探し、その始まりと終わりの五字をそれぞれ書きぬきなさい。

**問五**　――線部④「視線を朋樹に向けた」とありますが、この時の戸川の心情として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　地質学などを十分に学んだからこそ新しい発見ができた体験を伝え、朋樹にも将来大学に進学し、立派な研究者になってもらいたいと思っている。

イ　自らの学問研究において抱いた悩みや苦しみの経験から学べることを、今悩み苦しんでいる朋樹に向けて力強く伝えたいと思っている。

ウ　岩石の採取や種類の特定に何日もの時間が必要であったという話をすることで、朋樹に何事を成すにも継続（けいぞく）した努力が必要であることを伝えたいと思っている。

エ　調査区域の地質構造が部屋全体に浮かび上がるような不思議な感覚の体験は貴重であるため、若い世代の朋樹に伝えたいと思っている。

**問六** 1 にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　動ずることなく
イ　目を丸くしながら
ウ　身じろぎもせず
エ　なす術をなくして

**問七** ――線部⑤「ここへ来てわかったのは、ただ一つ」とありますが、このときの朋樹の心情を説明したものとして、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　志望校や塾や家族のことで悩み、自分がどのように歩むべきであるかをわからないでいるが、まずそのことを認め、行動に移していくことが必要なのだと実感している。
イ　志望校や塾や家族のことで悩むことが重なり、自分がどのように行動するべきかを見失いがちになっていたが、夏空の下で汗を流していると、すべてのことをいったん白紙にできるのだと実感している。
ウ　充実した気持ちになれない理由を見つけられずに過ごしていたが、自分の悩みの根本的な原因が見つかり、その問題解決に向けた具体的な方法が何であるのかをはっきりわかったと実感している。
エ　充実した気持ちになれないで苦しんでいたが、アンモナイトが環境の変化に適応できずに絶滅したことがわかり、自分はどんな環境にいても、化石のようになってしまわないようにしようと実感している。

**問八**　――線部⑥「ハンマーがめり込むような手応えとともに、鈍い音が響いた」とありますが、これはどのようなことが表現されていると言えますか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　アンモナイトへの強い興味から懸命（けんめい）に発掘作業をしてみたが、その努力が実り、今までにない重大な発見になるであろうことが実感的に表現されている。

イ　アンモナイトの実体が一体何であるのかという関心が、やがて朋樹自身の本心を探すことに重なり、その存在の確かさに手応えを感じ始めたことが象徴的（しょうちょう）に表現されている。

ウ　アンモナイトの実体が何であるのかは諸説あるが、イカやタコの仲間であろうという説にしたがって取り組んだ発掘作業に、間違いはなかったことが実証的に表現されている。

エ　アンモナイトを先に発掘することで、未熟な子供あつかいする戸川に対して負けまいとする朋樹の熱い思いを示し、その様子が肯定的（こうてい）に表現されている。

**問九**　この物語の表現や内容における特徴の説明として、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　会話文でたびたび記されている「――」は、相手に遠慮してあえて語らないときに用いられ、「……」は、言うべき言葉が見つからず、悩んでいたり考えていたりするときに用いられている。

イ　「ゴーグル」、「ハンマー」、「キャップ」や「キンキンキン」などのカタカナ表記の言葉は、物語全体を躍動的（やくどう）な雰囲気（ふんいき）にする働きがあり、小学生の朋樹のひと夏の冒険（ぼうけん）を印象づけている。

ウ　多用される科学的な用語が物語の世界観を作り出し、その中で現代の若者らしい口調や態度をとる朋樹の、年長の戸川との出会いをとおして、少しずつ心の成長をしていく姿が描かれている。

エ　物語の前半では、現代社会に生きる一人の少年の現実的な状況を印象的に描き出し、後半では、科学的に過去の歴史に向き合うことこそ、現代人が前向きに生きられる方法であることを暗示している。

**問十**　この物語は、化石を発掘する場面が描かれている点で、次に示す『銀河鉄道の夜』と共通します。『銀河鉄道の夜』（ｘ）と、この物語（Ｙ）との比較の説明として最もふさわしいものを後から選び、記号で答えなさい。

「*1君たちは参観かね。」その*2大学士らしい人が、眼鏡をきらっとさせて、こっちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざっと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているとこに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこ*3つるはしはよしたまえ。ていねいに*4鑿でやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい。そこも*5スコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。

（宮沢賢治『新編　銀河鉄道の夜』）

（注）＊1　君たち…登場人物のジョバンニとカムパネルラのこと。
＊2　大学士…役人か学者を指すと思われる。
＊3　つるはし…主に固い地面などを砕く道具。
＊4　鑿…木材や石材や金属などに、細かく穴を掘ったり彫刻したりする道具。
＊5　スコープ…スコップ（土砂を掘ったりすくったりする道具）を指すと思われる。

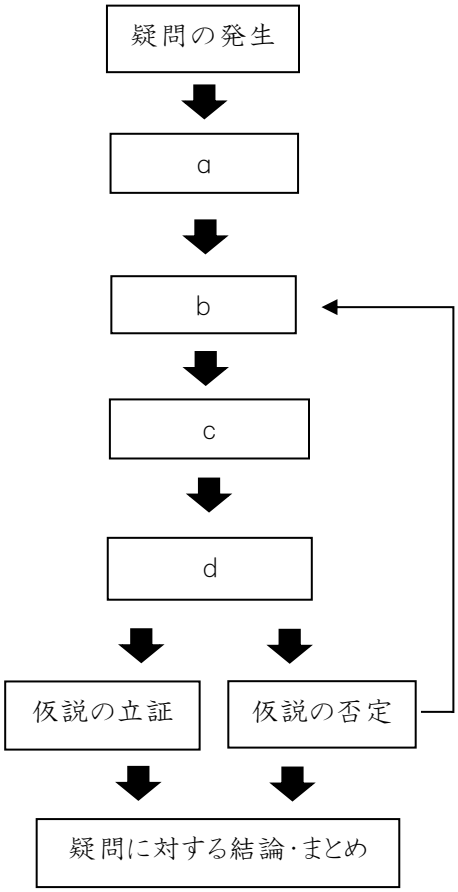
ア　（X）では、化石の発掘をする者たちが十分な知識と技術を持ち合わせていないため、たびたび大学士に注意を受ける姿が冷ややかに描かれているが、（Y）では、未熟な知識と技術しかない朋樹が、熟練（じゅくれん）の技能を戸川から教わり、専門性を身につけていくことに喜びを感じる姿が感動的に描かれている。

イ　（X）では、大学士は、だれがどのような調査研究をしても過去の地層や化石が確かに存在していたことを証明しようとしているが、（Y）では、朋樹の行動をとおして、古代に生きたアンモナイトがどのように生息していたかを証明しようとしている。

ウ　（X）では、地層や化石を調べている理由を、大学士は、それらが風や水などと同じように、どこにでもある平凡（へいぼん）でさして意味のないものと同じであることを証明しようとしているが、（Y）では、地層や化石を研究する中で、戸川は、私たちの生活でわからない物事に出会った場合は、まずわからないという事実を自己認識（にんしき）する必要があると考えている。

エ　（X）では、地層や化石を調べている理由を、大学士は、だれから見てもそのものがこの世界に確かに存在していたかどうかを示すためであると考えているが、（Y）では、地層や化石の研究をとおして、戸川は、私たちの前に困難な出来事が生じたとしても、その問題にしっかり向き合うことで解決の手がかりが見つけだせるという考えにいたっている。

**問十一**　この物語では、朋樹も戸川も岩石の種類をどのように分類していけばよいのかという疑問に向き合う場面が描かれていました。このように何か疑問が生じたことに対して、論理的・科学的に向き合う場合、次の図に示すような取り組みが基本になるといわれています。空らんａ～ｄにあてはまる１～４の組み合わせとして最もふさわしいものを後のア～エから選び、記号で答えなさい。




１　観察・実験・調査

２　事前調査（情報収集・疑問の分析（ぶんせき）・整理・予備観察・予備実験）

３　結果の処理と考察

４　仮説（仮に立てた説）の設定

ア　a－２　b－４　c－１　d－３

イ　a－２　b－１　c－３　d－４

ウ　a－４　b－１　c－３　d－２

エ　a－１　b－３　c－２　d－４

## 三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

### ウイルスと気候変動

*1ポストコロナの時代には、大人たちに助言を求めるのを止めたほうがいい。偉そうに何かを言ってくる大人がいたら、無視していいのではないか。本来、大人たちに、これからの世代に助言を与える資格などないのだ。この危機を作り出したのは、大人たちなのだから。

だから、私自身を含め、大人たちはまず謝らなくてはいけない。

新型コロナウイルスが流行したせいで、君たちは学校に行けなくなり、勉強に遅れが出た。卒業式や修学旅行もなくなった。部活もできないし、友達と気軽にカラオケにも行けない。学校生活が一変してしまったことについて、私たちは、謝らなくてはならない。

同じ島国の台湾やニュージーランドのように、感染症が広がらないように、日本ももっとうまく対処できたはずだ。日本で、ここまで感染が広がってしまったことは、政治的失態である。

けれども、政治だけのせいではない。大人たちは、もっと別のことを謝らないといけない。今回の感染症の大流行は、現代社会が抱えているもっと根本的な矛盾が、たまたま感染症という形で*2露呈したにすぎない。真の、問題はもっと深いところにある。そして、それは今回のウイルスに対するワクチンが開発されたとしても、なくならないものだ。

そう、大人たちが地球全体で、向こう見ずな環境破壊を続ける限り、同様の危機は繰り返し、また別の形でやってくる。人間は自然の一部であるにもかかわらず、自然を破壊しつくそうとするなら、そのしっぺ返しは、コロナだけでは終わらない。

私たちの時代は「人新世」と呼ばれる。人類の経済活動が地球全体を変容しているという意味だ。

なかでも、特に深刻な人新世の危機が気候変動である。このまま突き進めば、気候変動はもっと深刻な危機的状況を、今後数十年のうちにもたらすことになる。しかも、気候変動は*3不可逆的で、元の状態に戻す治療薬は存在しない。

実際、産業革命前と比較して、わずか1℃の気温上昇であっても、すでに、世界中で、豪雨、洪水、干ばつ、熱波、山火事などの異常事態が発生している。日本でも、スーパー台風や梅雨の集中豪雨、酷暑など、気候変動の影響が出てきている。

ところが、このままのペースで二酸化炭素排出が続くなら、２１００年には、世界の平均気温は、なんと約４℃も上がってしまう。そうなれば、世界中で、深刻な食糧危機や水不足が発生し、もはや、東京や大阪のような大都市での生活は維持不可能になる。

**忘れっぽい大人たち**

だから、本当は今すぐにでも、大胆な行動を起こさないといけない。けれども、①大人たちは忘れっぽい。「自然を大切にしよう」親や先生から、何度もそう言われたに違いない。にもかかわらず、大人たちは、自然をまったく大切にしてこなかった。＊4痴呆症のように自分で言ったことを忘れてしまうのだ。

子どもたちに忠告した後、大人はスマートフォンでインスタグラムやＦａｃｅｂｏｏｋを開く。そこには、海外旅行、ＢＭＷやポルシェ、ブランドの洋服、高級レストランといった華やかな世界がある。たくさんお金を稼いで、ＳＮＳで自慢できるような生活をすることが、カッコいいと本気で思っている大人が、世の中にはどれだけ多いことか。②問題は、その憧れの生活が「自然を大切にする」ことと相容れないという事実である。

たしかに、華やかな生活は魅力的だ。スーパーやデパートに行けば、世界中のものがなんでも手に入る。欲しいものも、無限にあるだろう。

けれども、そうやって、何でも手に入るような暮らしを続けるためには、いろいろな資源を世界中で掘りつくして、日本に集めてこないといけない。例えば、和食は美味しいと言うけれど、日本は食料自給率がとても低く、３割台しかない。種子、肥料、耕作機なども入れると、ほとんどが海外からの輸入に頼っている。「日本の食卓の豊かさ」などというものは幻想だ。海外の食品を買い叩いているにすぎない。３００円の牛丼は、まさにその象徴である。

食事だけでない。石油、石炭、アルミニウム、リチウム。私たちの日常に欠かせないものの原料は、多くが外国からの輸入品である。日本の豊かな生活の裏では、熱帯雨林の森林伐採が進行し、生態系が破壊されている。

要するに、今の日本の豊かな生活が地球にかけている負荷は計り知れない。今の生活は、便利で、快適だが、その便利さは、「遠くに」住む人々やその自然環境に極めて大きな犠牲を強いているのである。

ところが、これまでこうした犠牲は、ブラジルとかインドとか、日本人の生活には直結しない、「遠いところ」で繰り返されてきたため、無視されてきた。それがついに、気候変動や＊5パンデミックという形で、日本でも深刻な問題を引き起こしつつある。

今後、気候変動によって、世界的な食糧危機が生じれば、食料自給率の低い日本も影響を被る。その時、私たちの生活はどうなるだろうか。今回のパンデミックの時に、マスクや消毒液も手に入らず、困ったのを思い出そう。

一見、とても豊かで、なんでも売っているようにみえるけれど、実は、日本は生活に必要不可欠なものを作ることができない。利益優先で、効率性やコストカットだけをひたすらに求めていくと、最終的には、思わぬ形で、危機への対応力を失ってしまうのである。

ここでのスキャンダルは、＊6多国籍アグリビジネスや＊7石油メジャーは、ウイルスや気候変動の危険性を十分にわかっていたのにもかかわらず、自然の破壊を続けてきたということである。パンデミックも気候変動も、科学者たちは警告していた。けれども、そうした警告は、意図的に無視されたのだ。

なぜだろうか。大人たちは、乱開発から恩恵を受け、豊かな生活を＊8享受することができたからだ。だから、政治家も、企業も、そして私たち消費者も、そのような行為を黙認し、問題解決を、ひたすら先送りにしてきたのである。

そして今、大人たちが楽な選択をしてしまったことの＊9ツケを全部、未来の世代に払わせることになっている。間抜けな大人たちの尻ぬぐいを、子どもたちに押し付けてしまうことを、大人たちは本当に反省しなくてはならない。

## 未来への大分岐

そんななか、今回の新型コロナウイルスは多くのことを気付かせてくれた。③人類は今度こそ反省し、失敗から学ぶ必要がある。もしかすると生活を改めるためのラストチャンスかもしれない。その意味で、私たちは未来の分岐点に立っている。

まず、専門家や政治家は、ウイルス対策を必死に考えているけれど、なかなかうまくいっていない。これだけ経済や技術が発展していても、ウイルスのような自然の脅威を前にしては、結局人間は無力なのだ。社会の繁栄というのは、非常に＊10脆弱で、繊細なものなのである。だからこそ、人間は自然を自在に支配できるという驕りを捨てなくてはならない。自然を健康な状況にしておかなければ、そのしっぺ返しは、自分たちのところへ跳ね返ってくる。

また、④私たちは「ソーシャルディスタンス」に、日々苦労している。距離を取ろうとすればするほど、私たちは普段どれほど他者とつながっているかを痛感させられるのだ。今まで当然のように手にしていた商品も、生産、物流、販売、デリバリーなど、多くの人の手を通して、自分たちのところに届く。他者とつながることでのみ、私たちの生活は可能である。けれども、それが同時に感

染拡大のリスクになっている。

そんななか、世の中には、大金持ちで、最新テクノロジーを駆使して、快適なテレワークをしながら、アプリで食事や買い物のデリバリーを頼んでいる人もいる。けれども、医療、保育、教育、介護などの「エッセンシャルワーク」と呼ばれる、社会にとって不可欠な仕事に従事している人は、他者と距離を取ることができない。そうした人は、大きなリスクに晒されながら、低賃金で必死に働いている。

気候変動の場合も、もしあなたがとても裕福であれば、別の国に引っ越せるかもしれない。水や食糧の価格が高騰しても、問題なく支払うことができるだろう。でも、そんなことができるのは、一握りの人だけだ。

その一握りのグループに入ろうとして、必死に頑張るのも一つの選択肢である。けれども、今のような大量生産・大量消費を続けるなら、「普通の」暮らしをできる人の数はますます減っていく。そう、コロナ禍で、「普通」の生活をできる人が大きく減ってしまったように。

危機が深刻化するときには、今まで通りのルールのもとで、自分だけが勝ち残ろうとしても、うまくいかない可能性が高い。地球は一つで、人々はみなつながっているのだから。

私たちはこのまま自然を破壊する道を突き進んで、分断や孤立化を推し進めるような社会をつくるのか。それとも、人々とのつながりや相互扶助、連帯や平等を重視し、自然を大切にする持続可能な社会への転換を図るのか。その分岐点に、私たちは立っている。

未来がどうなるかはわからない。けれども、⑤有限な地球で無限の経済成長を目指すことは、どう考えても、不可能である。だからこそ、経済成長を最優先にしたシステムからの大転換が今こそ必要なのではないか。経済成長ではなく、自然との共存や人々の幸福を重視する経済への転換が。

ところが、資本主義で競争して、自分だけが生き残ることに必死になっている大人たちには、この社会を変えるための＊11ビジョンを思いつくことができない。

だとすれば、新しい世代が立ち上がって、社会を動かすしかない。

## 未来は自分たちで作る

いま、世界では、Ｚ世代と呼ばれる２０００年頃以降に生まれた子どもたちが、社会を変えるために必死に声を上げている。そう、

みなさんと同じ世代である。

なかでも有名なのは、15歳の時に、たった一人で、国会議事堂の前で座り込みを始めたスウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリだろう。

彼女が行動した理由は単純だ。大人たちが自分たちの家（＝地球）が燃えているにもかかわらず、気候危機を危機として扱わないからだ。スピーチのなかで、彼女はこう述べている。

「責任を負うべき人はいます。一部の人々――とりわけ一部の企業や決定権を握る人々――は莫大なお金を儲け続けるために、どれほど貴重なものを犠牲にしているか正確に知っているのです。私は、そうした企業や決定権を握る人たちに、気候に関して表面的でない大胆な行動を起こしてくれるよう要求します」

もちろん、⑥冷笑的な大人たちは、「そんなことはムリ、子どもは現実をみていない」と言う。それが現実主義でカッコいいと、本気で思っているのだ。そして、君たちを「ゆとり世代」なんて呼んで、小馬鹿にしながら、責任転嫁している。

けれども、気候変動についても、たった一人の抗議活動から始まったZ世代の運動が、社会を動かしつつある。これまで環境団体が必死に署名活動やデモをやってもなしえなかったような、大きな成果をもたらしつつあるのである。

例えば、＊12欧州は、２０５０年までに二酸化炭素排出をゼロにするために動き出している。「欧州グリーンディール」だ。ドイツは、２０３８年までに石炭火力発電もなくそうとしている。石炭火力発電を横須賀や神戸に建設中の日本と比べてみてほしい。

未来を作るのは君たちだ。声を上げなければ、今までの古いやり方が＊13惰性で続けられてしまい、状況は悪化するだけだろう。それは、負担を先送りしたい大人にとっては都合がいい。だが、それはフェアでない。古いやり方ではうまくいかなくなっている時代だからこそ、若い世代の新しい発想が必要である。

冒頭で、偉そうに何かを言ってくる大人は無視して構わないと言った。理由はもう一つある。大人たちだって、これから作るべき新しい社会の答えを知らないのだ。答えはまだ誰にもわからないような危機に今人類は直面している。答えがわからないからこそ、一から一緒に、みんなで考えようという姿勢が、ますます大事になる。

だから、君たちが声を上げるときは、「ムリだ」という冷笑主義者の言うことは気にしないでほしい。「ムリ」かどうかも、本当のところ、誰にも「わからない」のだ。彼らはただ、今の不合理なルールに慣れ切ってしまっていて、考えることを止めてしまってい

るだけである。

でも、彼らも自らの誤りに、いつかは気が付くことはできるはず。大人も自分たちの過ちを反省し、君たちと一緒に行動することができるはずだ。だから、僕らが頭を下げてきたら、どうか仲間に入れてあげてくれないだろうか。

（内田樹編『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』所収、斎藤幸平「ポストコロナにやってくるのは気候危機」）

（注）＊１　ポストコロナ…コロナ禍（新型コロナウイルス感染症の流行による災難や危機的状況）の後のこと。

＊２　露呈…隠れていた事柄が表面に現れること。

＊３　不可逆…再びもとの状態に戻れないこと。

＊４　痴呆症…認知症を指し、脳の障害により記憶や認識などの能力が低下し、日常生活が困難になる病気。

＊５　パンデミック…感染症が世界的に流行すること。

＊６　多国籍アグリビジネス…複数の国に対して行う、産業としての農業のこと。

＊７　石油メジャー…石油事業を世界で幅広く展開している国際石油資本。

＊８　享受…受け取って自分のものにすること。

＊９　ツケ…「ツケを～払わせる」の表現で、本人に代わって償わせるということ。

＊１０　脆弱…もろくて弱いこと。

＊１１　ビジョン…将来の構想。

＊１２　欧州…ヨーロッパ。

＊１３　惰性…これまでの勢い。

**問一**　――線部①「大人たちは忘れっぽい」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　大人たちは、「自然を大切にしよう」と子どもたちに忠告しながらも、自分たちはその大胆な行動を起こすための計画作りの作業にばかり熱中し過ぎて、実際の行動に移せなかったということ。

イ　大人たちは、「自然を大切にしよう」と語っていたが、高齢化で痴呆症になる人が増え、何を説明していたかを少しずつ忘れてしまい、子どもたちに指摘されるまで気づかなかったということ。

ウ　大人たちは、大胆な行動を起こさなければいけない出来事が発生しているのにもかかわらず、自分たちの発言を忘れてしまったかのように、忠告とは矛盾した行動をとっているということ。

エ　大人たちは、大胆な行動を起こそうと思っても、大胆な行動の意味をはき違えているため、結果的に子どもたちに言った忠告とは相反する行動をとり、子どもたちの信用を失ってしまっているということ。

**問二**　――線部②「問題は、その憧れの生活が『自然を大切にする』ことと相容れないという事実である」とありますが、「その憧れの生活」とはどのような生活ですか。文章中から二十五字の部分を探し、その始まりと終わりの五字をそれぞれ書きぬきなさい。

**問三**　――線部③「人類は今度こそ反省し、失敗から学ぶ必要がある」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　人類はこれまで豊かな生活を送るために手段を選ばず、地球環境に極めて大きな犠牲を強いてきたので、気候変動や食糧危機、パンデミックを引き起こしてしまうことになってしまったが、今度こそ大人たちは子どもたちと一緒にその責任をとらなければならなくなったということ。

イ　人類は豊かな生活を手にすることができた一方、自然破壊に対する科学者たちからの忠告を意図的に無視し、結果として今回のようなパンデミックを招くような失敗をしたが、自然に対する向き合い方を改め、未来のことを考えた選択をするべきだということ。

ウ　人類は新型コロナウイルスの流行を招いてしまったことを反省し、今回の大流行が起こった原因を科学的に分析（ぶんせき）し、今後同じような未知の病原体が発生しないように衛生管理に気を配り、健康な状態を保つことができるように自然をコントロールすべきだということ。

エ　人類は自然界を我が物のように支配したツケとして今回の新型コロナウイルスの感染爆発が起こってしまった理由と、自然の脅威に何もできなかった現状を理解し、今後は自然に手を加えるようなことは一切（いっさい）せず、また人との距離を十分にとった生活をするべきだということ。

**問四**　――線部④「私たちは『ソーシャルディスタンス』に、日々苦労している」とありますが、どのような点において苦労していますか。苦労している点として**ふさわしくないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　コロナ禍において最新テクノロジーを駆使して快適なテレワークを行える人がいる一方で、「エッセンシャルワーカー」と呼ばれる人々は、他者と距離をとることもできず、感染リスクの高い状況であるという点。

イ　コロナ禍において裕福な人々は海外に引っ越してウイルスと距離をとることができるだろうが、貧困層の人々は引っ越しをする金銭的余裕もなく、他者と距離をとることができないであろうという点。

ウ　コロナ禍において他人との接触機会を減らそうと意識しても、多くの人々の手を介（かい）さなければ私たちの生活は成り立たず、感染拡大のリスクを減らすことが難しいという点。

エ　コロナ禍において私たちは他人と一定の距離をとる生活を強いられてきたが、その結果、日本社会全体で人々の思いやりやぬくもりが感じられなくなってしまったという点。

**問五**　――線部⑤「有限な地球で無限の経済成長を目指すことは、どう考えても、不可能である」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　地球の資源は限りがあるのにもかかわらず、それを使って人類がいつまでも経済的に成長し続けることはできないということ。

イ　地球の食料資源の量は決まっているのにもかかわらず、人類がその獲得（かくとく）だけを考えて行動することはできないということ。

ウ　地球上で人と人とがつながり合える数は限界があるのにもかかわらず、あたかも世界中の人とつながりを持つことができるかのように考えるのは不自然だということ。

エ　地球上で裕福な暮らしができる人は一握りに限られているのにもかかわらず、全員が富裕層になろうとする考えには無理があるということ。

**問六**　――線部⑥「冷笑的な大人たちは、『そんなことはムリ、子どもは現実をみていない』と言う」とありますが、「冷笑的な大人たち」はなぜそのようなことを言うのだと考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　子どもたちは現実に起こっている気候問題を正確に分析できていないので安易に解決できることだと思っているようだが、科学的な分析をした結果、有効な対策などほとんどないと判断しているから。

イ　現実主義であることを本気で素晴らしいことだと考えており、その結果、子どもを小馬鹿にすることで責任を逃（のが）れ、今後の問題解決に向けた行動はすべて子どもたちに任せようと思っているから。

ウ　社会を動かしつつある「Z世代」に恐怖を感じた結果、現実主義という考えにたどり着き、その具体的な行動の一つとして子どもたちを見下す態度を取り、大人としての威厳（いげん）を保とうとしているから。

エ　子どもたちは気候危機が直面する問題を直視し、その解決に向けて大胆に行動することを求めているが、経済活動に支えられた社会の実体をわかっておらず、ただ理想を語っているのに過ぎないと思っているから。

**問七**　═══線部「ポストコロナの時代には、大人たちに助言を求めるのを止めたほうがいい。偉そうに何かを言ってくる大人がいたら、無視していいのではないか」とありますが、筆者がこう述べるのはなぜですか。本文全体をふまえた説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　今回のコロナ禍で引き起こされた原因は、これまで大人たちの切実な助言に耳を傾（かたむ）けてこなかった子どもたち側にもある。「ゆとり世代」であることを言いわけにして、子どもたちは政治のあり方をしっかり学ぼうとしたり身近な社会でできることに参加してこなかったりした。そのため、社会全体でコロナ禍への対応が十分でなかった点が生じてしまった。したがって、大人たちは現代社会のかかえる問題の解決案を「Ｚ世代」が今後新たに考え、行動するようにしてほしいと思っている。

イ　今回のコロナ禍で引き起こされた問題は、現代社会の抱える問題が表面化したことの一つであると考えられる。しかしその原因に責任を負わなければいけない大人たちは、問題解決の先送りをしているばかりでなく、実のところ今後どのような社会を作ったらいいのかを十分にわかっているわけでもない。したがって、子どもたちには大人たちに助言を求めるのではなく、むしろ今後の社会を一緒に考え、行動していってほしいと思っている。

ウ　今回のコロナ禍で引き起こされた様々な問題の原因は、子どもたちに忠告してきていたこととは反対に、自然環境の破壊に目をふせながら豊かで便利な生活を送ってきた大人たち側にある。そのため、大人たちはすぐにでも現代の生活態度を改める必要がある。したがって、もし大人たちが子どもたちに謝罪してきたとしても、これまでの生活態度を改めていこうとすることが証明されない限り、大人たちを仲間に入れる必要はないと思っている。

エ　今回のコロナ禍で引き起こされた出来事を考察してみると、国内では政治的な失態による問題が浮き上がってくるが、地球規模では人類の行き過ぎた経済活動の果てに環境を破壊し、危機的な気候変動を生じさせた問題にもつながっていることがわかった。したがって、子どもたちは大人たちと同様に人類の一員として現代の経済活動の恩恵を受けて生活する以上、今後は大人たちに助言を求めるだけでなく、むしろ大人たちに助言する立場になる必要があると思っている。

（　お　わ　り　）

二〇二二年度
湘南白百合学園中学校入学試験

# 国語解答用紙

受験番号

氏　名

得　点

※

※には何も書かないこと

## 一

問一
① な
② け
③ る
④ く
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩

問二
①
②
③
④

問三
(1)
A
B
(2)
A
B

問四
①
②

問五
1
2

## 二

問一

問二

問三

問四
始まり
〜
終わり

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

## 三

問一

問二
始まり
〜
終わり

問三

問四

問五

問六

問七

※

※

※